

トラップ・ニューター・リターン

Trap-Neuter-Return — 野良猫たちと共に

ニューヨーク市 ネイバーフッド・キャッツによる 2003年度「Asia for Animals」会議のための資料

トラップ ニューター リターン

Trap-Neuter-Returnとは?

トラップ・ニューター・リターン(捕獲、避妊・去勢して、返す)とは、野良猫増加の抑制に効果的であると確認されている唯一の方法のことで、一般的にはTNRとして知られています。TNRでは、コロニー(生息地区)内すべてあるいは大部分の猫を捕獲し(トラップ)、避妊または去勢手術を施し(ニューター)、最終的に、元のテリトリーに返す(リターン)作業をします。避妊・去勢が済んだ証として耳の上部を少しだけ切り取った痕で見分けられるようにされ元の場所に返された猫たちには、定期的に食事を与え、シェルターを作り、世話人が新入り猫などの監視をします。また、いつでも可能な限り、まだ容易に人に慣れさせることのできるくらい若い仔猫や人懐っこい成猫は、保護して里親を見つけてあげるようにします。

繁殖力のある成猫のうち、少なくとも70%の避妊・去勢手術にTNRで成功すれば、そのコロニーのサイズは直ちに安定化できます。100%に近い成功率であれば、時間の経過と共に数は減少していきます。さらに、野良猫とよく関連付けられがちな苦情なども劇的に減ります。その例として、ケンカや交尾時の鳴きわめきや騒がしい鳴き声、去勢されていない雄猫が自分のテリトリーを主張する時に噴きかける匂い等があります。手術済みの猫は以前より狭い範囲で行動するようになるため、目立たなくなります。ネズミ対策として猫の担う自然な役割がそのまま継続されることは、特に都会では価値あるメリットになります。

TNRはコミュニティ全体においてもいくつかの利点をもたらします。最も重要なのは、野良猫に避妊・去勢の手術をすることにより、道ばたから保健所に持ち込まれてしまう成猫や仔猫の数が低減することです。これは安楽死の確率に対してかなり肯定的な影響を持ちえます。例えば、サンディエゴでは、郡全体でTNRを行ったところ、たったの2年間で猫の安楽死率が40%以上ダウンしました。サンフランシスコでは、市全体でTNRプログラムを6年間行ったところ、家猫と野良猫を合わせたすべての猫における安楽死率が70%以上ダウンしました。野良猫の数が減ると家猫の安楽死率が減少するのは、飼い主のいない仔猫が減れば、それだけ里親に引き取ってもらうための競争も減るからです。

大規模なレベルにおいて言えるもうひとつの利点は、動物管理局における経費削減です。従来、野良猫の経費には、役員が猫を捕獲するのにかかる時間と、安楽死を執行するまでに通常義務づけられている待機日数の期間に給餌と保護のためにかかる費用、そして安楽死の手順にかかる費用が含まれています。対比的に、TNRに伴う唯一の費用は、各猫の手術代とワクチン代のみです。捕獲や給餌といった他の作業はボランティアによる仕事です。フロリダ州オレンジ郡における調査では、2年半に渡る新しいTNRプログラムにおける経費削減は47%(この場合においては合計109,000ドル以上)だったことが分かりました。

TNRは命に肯定的で、そのこと自体が利点でもあるため、多くの人数のボランティアを動かす力もっています。現在多くのコミュニティで野放し状態である膨大な数の野良猫を捕まえるためには、大勢のボランティアが必要です。動物管理局だけでは、この問題にわずかでも減少をもたらすことさえ、めったにできないことなのです。究極の最終目的が猫たちを殺処分するというものであるならば、このボランティア軍勢は援助を申し出ないでしょう。しかし、猫たちは解放され、その後も世話をされるのだと知るにより、人々は時間と尽力を提供してくれることは、経験がくり返し実証しています。

他のアプローチでは不成功に終わった

おそらくTNRを支持する理由において最も重要なのは、それを正確に実行することによって、野良猫の数を抑制するのに成功するだけでなく、TNRが今まで知られている中で唯一の成功した方法であるということでしょう。従来のアプローチの仕方は「捕獲・殺処分」というもので、その方法により野良猫はたいてい動物管理局に捕獲され、例外なく安楽死させられていました。ほとんどの地域に典型的に見られる、制御しきれないほどの野良猫の数は、その方法では失敗しているという証拠として十分でしょう。長い目で見て、なぜそれがいつもと違っていいほど失敗に終わるのかは、明らかです。

第一に、TNRで活動するにつれてあなたも発見するように、野良猫コロニーに生息しているすべての猫を捕まえるのはたやすいことではありません。もし多数の猫がいるなら、数日間と粘り強さが必要です。動物管理局にこのような持続した作業をするための人的資源や資金はめったにありません。その代わりに、動物管理局の役員がたいてい何をするかというと、彼らはいくつかの捕獲器を用意し、猫を何匹か捕らえ、コロニーの頭数を一時的に減らすのです。しかし、この時点で自然の法則が働きます。野良猫コロニーのサイズは、食料源が支持できるだけの数まで増加します。一度コロニーが減少すれば、残された猫たちは食料源に比例するだけの限界に達するまで再び繁殖し続け、一時的に減少された頭数はすぐに元に戻ります。

仮にコロニー内のすべての猫を捕まえて除去したとしても、長期的に見て、そうすることで頭数は減少しないのです。これはロジャー・テイバーがロンドン市街の野良猫たちの研究(『*The Wild Life of the Domestic Cat*」参照)において最初に観察した「バキューム(空所)作用」といわれる現象が原因で起こります。野良猫コロニーひとつとして孤島はなく、それぞれが隣接したテリトリー別の野良猫集団に囲まれています。もしコロニーが除去されても、食料源が引き続き残存すれば、周辺テリトリーの猫たちがそこに移り住み、再び繁殖の連鎖を始めます。通常、そういう猫のほとんどは、既に十分な数の猫に陣取られているテリトリーには流入してこないものなのです。

中には、それならば猫たちと一緒に食料源をも除去することで前述のパターンを回避できないかと疑問に思う人がいるかもしれません。実践することに比べたら、口で言うのははるかに易いです。レストランや食堂の残飯も、収集トラック用に出された生ゴミも、野良猫にエサを与え続けている世話人が置いていく缶詰も、食料源になります。これらすべてを規制して、エサが提供されるのを阻止しようとするのは、とても現実的な選択とはいえません。

この点において、なぜある地域から野良猫を根絶するのがほとんど不可能に近いのかという別の理由として、世話人たちの存在があげられます。野良猫を世話している人たちは貢献的な類で、野良猫にエサを与え保護するために、エサあげ禁止令をあえて無視したり、個人所有地に侵入したり、動物管理局の捕獲作業を阻止したりまでして、彼らの力の範囲でできることであればたいていのことはします。「捕獲・殺処分」というアプローチは、こういった世話人たちを敵にまわしてしまうのです。その反面、TNRでは彼らを猫の頭数を抑制するための非常に大きな勢力として動員するのです。

TNR以外の選択肢として不成功に終わった別のアプローチに、原則的に猫は室内動物で人間の家にいなければならないとみなすレスキューモデルがあります。大半が最近置いていかれたばかりという猫がほんの数匹いるといった状況下では、この見方はもっともかもしれませんが、目下、多くの国において何百万匹という野良猫たちを抱えた現状においては、理にかないません。幼猫期を過ぎると野良猫たちは人間に慣れさせるのが非常に難しくなり、どちらにせよ、彼らを迎え入れることができる十分な数の里親はとうてい間に合ってはいないのです。保護された室内猫のうち、相当な数の猫が、シェルターに空きがないためにそこで死んでいきます。外でも生存していける野良猫を、彼らのユニークな生態により適合している路上での生活から、なぜわざわざ引き離すのでしょうか？

また、個人の状況でよく使われる別の方法に、エサを取り上げることによって野良猫を追い払おうとするものがあります。猫が別の食料源を探さだろうという考え方がここに働いています。実際のところ、猫

にエサを与えないようにすることで、逆効果のことがよく起こってしまい、もっと集まってくるようになります。野良猫たちは非常に縄張り意識が強いため、どこかに出て行ったりはしないのが彼らの自然な性質です。どこか別の場所にエサを探しに行くよりは、生活維持のために自分のテリトリー内にある人間の住宅域にもっと侵入するようになります。それどころか、野良猫にエサを与えないことは明らかに彼らを餓死に追いやることになり、これは非常に残酷な行為です。

猫の生きる権利を尊重し、置かれた状況下において可能な限り良質な生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)を彼らに提供するTNRには、人道的な長所があります。また、TNRは、個々のコロニーと地域全体において、野良猫の数を減らすのに効果があります。他の方法では、もっと費用がかかるばかりか、効果がないのです。明らかに、TNRは野良猫ケアの進化した将来像なのです。

“野良”猫とは？

野良猫とは、いくらか野生に戻った状態の猫をいいます。野良猫とは、元々は人間に飼われていた猫で、迷子になったか捨てられ、倉庫、工場、廃墟や物置などの構造物の中や、野外で生活することを学んだ猫をいいます。彼らは、都会でも田舎でも順応し、例としては、裏路地、駐車場、海辺の防波堤などの場所に生活場所を見つけます。野良猫は、1日に1～2度来る世話人であれ、レストランの外にある大型ゴミ容器であれ、ゴミ箱であれ、ほとんどの場合、食料源をなお人間に依存しているため、完全には野生化していません。狩りだけを頼りに生きている猫は比較的少ないのです。

猫がどれだけ“野良”なのかは、いくつかの要因によって決まります。まずは猫の年齢があります。仔猫が人間に慣れる可能性は生後6～7週間を過ぎた頃から低下し始めます。また、何世代に渡ってある特定の系列の猫たちが人間の家の外で暮らしてきたかも、もうひとつの大事な要因です。人間に飼われていた母猫から生まれた仔猫は、外猫歴10世代目にあたる仔猫に比べれば、より“野良”でなくなる傾向があります。3番目の要因は人間との接触の度合いです。もし人と定期的な接触を持つ猫であれば、人間と全くあるいはほとんど接触のない場所に住んでいる猫に比べ、より野性的でなくなります。最後に、各猫に特有の性格を考慮しなければなりません。時折、人間とめったに接触しないで何世代も野良猫だった祖先を持ちながらも、とても人懐こい成猫に出会うことがあります。しかしこれはかなり例外的といえるでしょう。

もし猫が芯から野良なのであれば、その猫を外で生活させてやるのが一番思いやりのある選択かもしれない、という認識は重要です。そういう猫を家で飼い馴らそうとするのは、リスやアライグマを室内ペットにしようとするのと何ら変わりありません。ある程度は成功したとしても、決して完全ではなく、それも多大な時間と忍耐力のうえでのことです。その上、その動物にとって一番適した方法で生きることを許していないこととなります。家に連れて来ることで野良猫を“助けて”いると確信を持った多くの善意ある人々が、ベッドの下に隠れ続けて常に恐怖を感じる生活を、結局、そのかわいそうな動物に強いる結果に終わっています。リスクが多くても、自由に満ちた一生の方が良いのです。

TNRを導入する —— コロニーを管理するというアプローチ

以下は、ひとつのコロニーでTNRを実行する際に必要なステップの概要です。それぞれのステップについてさらに学ぶには、ステップ1に記載されている情報源を参考にしてください。

ステップ1: 自ら学ぶ

野良猫コロニーを管理する計画を試みる前に、トラップ・ニューター・リターンについてできるだけ多く学んでおく必要があります。TNRの仕事は、ただ単に猫の世話をすることだけを意味するものではありません。彼らの擁護者としての役割も仕事なのです。これを効果的に行うためには、仕事の対象をよく知っておく必要があります。幸いなことに、早く学べるための情報源は用意されています。

1. **ネイバーフッド・キャッツの『Trap-Neuter-Return: Managing Feral Cat Colonies』オンラインコース**
(全体の概要を見るには、www.suite101.comへアクセスし、Pets & Animals担当部署をクリックして、TNRコースを開けてください。すべての書面資料への即時アクセスには\$14.95USDドル、インタラクティブ掲示板バージョンは\$19.95USDドルの費用がかかります。)このコースは、TNRの仕事始めるのに必要なすべてを学べる総合プレゼンテーションです。発展途上国の受講者を対象に、ANIMAL PEOPLEとの共同プログラムによる奨学金制度があります。(連絡はANPEOPLE@whidbey.orgまで。)
2. **アリー・キャット・アライズのWebサイト(www.alleycat.org)** 米国最大の野良猫団体Alley Cat AlliesのWebサイトでは、TNRのあらゆる側面に関するファクトシートや記事を提供しています。
3. **ネイバーフッド・キャッツWebサイトのInfoページ(www.neighborhoodcats.org/info)** 私たちのWebサイトでは、野良猫コロニーを管理するための基本的な手順を分かりやすい形式で紹介しており、コロニーの世話人にとって役立つヒントや情報が満載です。

ステップ2: 地域社会と良い関係を育む

野良猫のテリトリーはたいいてい人間の住む場所や労働地域と重なり合っていて、多くの場合、地域住民と猫たちは独自の関係を築いているものです。その多くは猫を好ましく思い、エサをあげたり面倒をみたり、手助けするかもしれません。また他の人は、猫を迷惑と見なし、居なくなってほしいと思うかもしれません。どちらの姿勢が主流であろうとも、両者を配慮してTNR計画が成功するように働きかけなければなりません。例えば、土地所有者に通知をせず、許可を得ないままその土地に手術の済んだ野良猫を返そうとすれば、後になって立ち退きを強制されるはめになったり、思いがけない災いを招くことになりかねません。反対に、土地の所有者にTNRの利点(「仔猫ゼロ、騒音ゼロ、臭いゼロ」)について啓蒙し、猫の捕獲を始める前に許可を得ることで、コロニーの猫たちが長期に渡って安全に過ごすことができるよう助けることができます。

近所の人々が猫に対して抱いている雰囲気把握するひとつの方法としては、単に歩きまわってみて、その住人(特に長い時間を外で過ごしていそうな人など)に話しかけてみることです。接し方や身だしなみにおいてもしっかりプロフェッショナルに接し、いくつか資料も持ち合わせているといいでしょう。そして、何匹の猫がいるのか、誰が食餌の世話をしているのか、猫はどこで生活しているのか、どれくらいの間そこにいるのか、誰か今まで取り組んで何かしようと試みたことがあるのか等、聞き出してみてください。後に役立つかもしれないので、名前と電話番号をメモしておくといいでしょう。管理人に話をし、もし家主や土地所有者と会う必要がある場合は、予定をとってください。特に建物の中で働いている人は、猫に一番友好的かもしれません。というのも、彼らはネズミ番として猫がどれだけ貴重な存在か知っているからです。

多くの場合、私たちが最初に野良猫の難局に気づくのは、猫の頭数が頂点に達した時です。もちろん、ほとんどの人たちはどのようにしてその問題を解決できるか認識不足であるために、野良猫とその世話人に対する敵意を抱き始めます。重要なのは、ある程度の敵意を覚悟しておいて、真正面からの対立や口論に引き込まれないことです。代わりに、理解を示すようにしましょう。もし、毎夜午前2時に泣き喚く猫の声によって起こされていたり、臭いのせいで自分の庭を使えなかったりしたら、たぶんあなたも腹を立てることでしょう。すべての猫を処分しようとしても解決できずに連鎖を維持してしまう反面、どのようにしてTNRがこれらの問題を解決できるか、穏やかに、しかし粘り強く説明しましょう。猫に今までの生活を維持させながらも問題を起こす行動を解消する、という人道的な方法に対して、人々はたいいてい理解を示してくれます。

もしTNRにどうしても賛同しない人がいる場合は、とにかく説得するよう努力を続けることです。現状の野良猫の数と里親を見つけられない可能性を考えると、移住や救助を試みるのはほとんどといって現実的な選択とは言えません。よって、野良猫が居住するテリトリーでTNRを機能させることが重要です。動物管理局や地域の動物福祉団体のサポートを得ると、助けになります。しかし、残念なことに、人は時折つらい経験を通して、捕獲処分に効き目がないことを学ぶ必要があります。そのような、無益なだけの試みに時間と費用を費やした後から、TNRをもっと受け入れるようになるのかもしれませんが。

ステップ3:エサをやる場所とシェルターの設置

野良猫の捕獲と避妊・去勢手術を行うまえに、コロニーの上手な管理を始めましょう。エサやり場の設置と定期的な給餌スケジュールの設定をすることで、とても習慣的な動物である猫たちを、一定の時間と場所に現れるようにトレーニングするのです。捕獲する時に、これは重宝します。エサを与えないことで、捕獲器に入るくらい十分に猫を空腹にすることができ、その上、猫を追いかけ回す必要がないどころか、猫のほうから近寄ってきてくれます。また猫が何匹いるか数えることもできて、避妊・去勢手術の手続をする際や捕獲の際にちょうど合う数の備品を用意するのに重要となります。コロニーの猫の数の不正確な見積もりはけっこうよくあることです。人の言葉をそのまま信用せず、自分の目で確認しましょう。

定期的な給餌はまた、若い仔猫や人懐っこい成猫、病弱の猫などを見分ける機会を与えてくれます。もしいる場合には、管理を始める前に一時保護者や獣医師による診察を前もって手配しておく必要があります。この捕獲以前の序段階のあいだは、できるだけ高品質で栄養価の高い食べ物を猫に与え、手術と檻のストレスに耐えられる免疫力を強めておくことです。2～3週間のいい栄養供給は猫にありがちな病気、例えば上気道感染症(upper respiratory infections)や白癬(ringworm)による皮膚糸状菌症などを治すのにも大いに役立ちます。これは、猫が普段食べているのエサの品質が劣っている場合には特に言えます。

シェルターは健康のためにも大切です。冬の間は、猫には暖かく乾燥している寝床が必要です。ネイバーフッド・キャッツのWebサイト(ステップ1記載のInfoページを参照)では、冬のシェルターを簡単に安価に作れるシンプルな手順を紹介しています。更なる情報はアリー・キャット・アライズサイトで見ることができます。

どのようなタイプのエサやり場を使用するのは、猫のテリトリーにどのような手段でアクセスしているかによります。もし可能ならば、猫が一匹入っただけで他の猫が入れなくなるよう一側面が完全に開いた状態で覆いをした木製の箱の中に、お皿と自動給水器を設置します。もし毎日エサをあげることができない場合は、ドライフードの自動給餌器を置いてよいかもしれません。もし箱のような形のを設置することができない場合は、できるだけ人目から離れた場所にお皿とお水を置いておくのが一番いい方法でしょう。エサをやる場所とシェルターの両方は、通りがかりの人たちから一番目に付きにくい場所に置くと同時に、世話人にとって容易に近づけるような場所を選ぶよう心がけましょう。エサやり場がどこにあっても、清潔に保ちましょう。人は散らかっているのを見るのをたいていの場合には好きではないことは理解に難くないですが、近所の保健所などはとても嫌がります。ですので、よく気を利かせ、猫のためにも、食べ物をやる場所は毎日きれいに片付け、空になったお皿や缶が散らばったままにならないようにしましょう。

ステップ4:場所の確保

コロニーの猫の数が多い場合には、猫たちを捕獲するのに2日以上かかります。捕獲している間と手術後48時間は、捕獲した猫のための場所の確保が必要です。捕獲器はケージとしても使い、猫は手術の時を除いて、再び放す時までそこから出しません(後述の「ステップ7:捕獲器に入った猫の世話」を参照)。保留場所には、猫の頭数と同じ数の捕獲器をきちんと置けるだけの、十分な広さを確保する必要があります。世話人が動き回って給餌や掃除をするのに十分な空間です。また、知らない人からの危険がなく、天候の変化から保護でき、冬には暖かくできるスペースでなければなりません。使えそうなスペースの例としては、ガレージ、地下室、倉庫、空き部屋など、また、暖かい気候の時期には、雨をしのぐためのテントや防水布が設置できるのであれば、裏庭さえ考えられます。

テーブルの上に捕獲器を置いておけば給餌や掃除が楽に行えますが、床の上に置いてもそれはできます。床あるいはテーブルの上にビニールシートを掛け敷いて、その上に捕獲器を置きます。一時保留場所は必然的にいくらか匂うことになってしまいますが、ビニールシートが捕獲器からこぼれる汚れをキャッチしてくれ、掃除を楽にしてくれます。猫の手術中に、ビニールシートを丸めて片付けて、新しいものと取りかえておくのは、いいアイデアでしょう。作業が終わり猫を放した後も、同じく取りかえておきましょう。

暖かい季節には、ノミの発生のリスクを最小限に押さえるため、軽い布で捕獲器を覆って、最後は完全に掃除機をかけるか、ノミ退治をしておきます。

ステップ5: 避妊・去勢手術の手配

この段階で、TNRがどのように機能し、TNRにどういった利点があるかについて、あなたは自らを教育して、また地域社会も教育したことになります。コロニーのためのエサやり場とシェルターが設置され、定期的な給餌パターンが確立されたことになります。何匹の猫がいるか分かっており、その中で特別に世話をする必要のある仔猫や病気の猫がいるかどうかも分かっています。そして、計画実行のために必要な場所の確保もできました。それでは、猫たちの避妊・去勢手術のための具体的な日程を手配する番です。理想的には、野良猫の取り扱いに経験があり、敏速に仕事ができる獣医師や動物病院を利用するといいでしょ。

ニューヨーク市では、獣医が野良猫を診るときに従う手順は、避妊・去勢手術→耳先カット→狂犬病ワクチンの順になっています。あるクリニックでは、ノミと耳ダニ用の薬物治療も行っています。耳先カットとは、左耳の先端から約6mmを横に直線に切り落とすことで、猫たちが放された後でも、手術済みの猫であることを素早く識別できるようにつけた印のことです。他にも写真、耳ピアス、刺青などの方法がありますが、あまり頼りにならないことが分かっています。猫エイズ(FIV)や猫白血病(FeLV)感染の検査は標準的な手順ではありません。検査をすると一匹の猫にかかる診療費が大幅に上がり、調査ではこういった病気の野良猫の集団における発生率は、飼い猫における発生率とほとんど変わらないことが分かっています(猫エイズでは1~2パーセント、猫白血病では2~4パーセント)。病気の感染を防ぐことが目的であるならば、検査よりも避妊・去勢手術に費用をまわしたほうが効率的です。言うまでもなく、もし特定の猫を里子に出す予定である場合には、検査は必須です。

ステップ6: 捕獲する

アリー・キャット・アライズでは“Humane Trapping Instructions for Feral Cats”(「野良猫の人道的な捕獲のためのインストラクション」)という大変便利なファクトシートを用意しています。実際に猫を捕獲するために必要な道具や、どのようにそれらを使用すればいいかを学ぶため、読んでみることを大いに推奨します。ファクトシートはアリー・キャット・アライズのWebサイト、あるいはネイバーフッド・キャッツWebサイトにあるInfoページ(“Trapping – the Basics”を参照)で見つけることができます。

たいていの場合に使われる捕獲器は箱型で、長さが36インチ(91.4cm)で、ケージとしても二重に使用できるよう後部に扉のついたものです。このタイプの捕獲器では、エサに届くまで猫に中に入ってもらう必要があります。そして猫が作動プレートに上がると、後方で扉が閉まるという仕組みです。(一部の捕獲器ではプレートがとても小さくてきていて猫がその上をまたいでしまうので、この場合はだいたい15cmくらいのダンボール紙片を上において面積を広くしておきます。)万が一、後方で扉が閉まった直後に、猫がひどく興奮し始めた場合には、シートで捕獲器を覆ってあげることで落ちつかせることができます。どちらにせよ、捕獲器に猫が入っている時は、布でカバーしておくのがいいでしょう。

捕獲を成功させるために最も重要なのは、猫がお腹を空かせていることなので、少なくとも24時間前からはエサを差し控えておきましょう。できるだけ一回の試みでコロニー全体を捕獲するのがベストです。必ず1匹か2匹、捕獲器に入るのをためらう猫もいて、中に入ってもらえるまでにエサを差し控えて2~3日間かかることもあります。こういう場合には、他の猫たちをすべて既に捕獲していれば、何匹もいるコロニーの中から特定の猫を捕獲しなくて済むので、作業がもっと楽になります。短期間におけるの集団捕獲は大変な作業ですが、長期的に見ればより少ない作業で仕事が済みます。おそらく、このアプローチでの最大の利点は、即時に達成感を満たせることでしょう。コロニー全体あるいは一部を避妊・去勢手術させることで、野良猫の増加と問題を起こす行動は即座に解決することができ、状況が直ちに改善します。

実際の猫の数より多めに捕獲器を用意しておいてください。そうすれば、最後の1～2匹を捕まえる時に、まだいくつか準備しておいた捕獲器があるので、捕獲が楽になります。猫が大暴れしてけがをしまう恐れがある場合を除いて、捕獲を開始した後すぐに急いで捕獲した猫を集めに行かないでください。捕獲中に作業エリアに入り込んでしまう度に、猫を怯えさせてしまい、逃げて行ってしまったままその夜の作業がもうできなくなるリスクを冒してしまいます。万が一、捕獲器を移動させる場合には、その同じ場所にまた別の捕獲器を置くようにしましょう。どういうわけか、多くの場合、猫が次々と捕獲器に入り続けてくれる“人気の場所”があるようなのです。

ここで、多くの人が考えがちな順序とは反対に、捕獲はTNRの過程において最初の段階ではなく、最後の段階に近づいた時点でされる、ということに注目してください。「まずは捕獲、後から思考」という順序では、たくさんの問題に突き当たることを保証しているようなものです。

ステップ7: 捕獲器に入った猫の世話

この過程は、ネイバーフッド・キャッツのWebサイトのInfoページで、写真付きで詳しく説明されています。捕獲器が猫のケージとしても役割を果たします。給餌と清掃はトラップ・ディバイダーあるいはトラップ・アイソレーターと呼ばれる簡単な仕切りを用いて安全に行うことができます。これは小さな熊手のような外見で、捕獲器の柵の間にはめ込むことによって、捕獲器の中の空間を区切ります。特に猫が捕まったばかりで、どうにかしてでも外に出ようと奮闘している時などは、協力しながらディバイダーを2つ使うといいでしょう。

猫を落ちつかせるために、捕獲器は常に軽い綿製のシートで覆われていなければなりません。(両端を通気用に開けておくのはかまいません。)野良猫は明るい場所から暗い場所へ移動しやすいので、猫にどちらかのサイドに動いてもらうには、行ってほしい側にシートを移動して暗くして、離れてほしい側のシートを開けて明るくします。それでも動いてくれない場合は、柵の間から入れたディバイダーで軽く押ししてみると、たいてい移動してくれます。片方のサイドに猫を移動することができたら、トラップ・ディバイダーを使って猫の位置と残りの空間を区分します。そうしたら、反対側にある扉を開け、その側の底に新聞を敷きます。次に、また同じやり方でもう片方のサイドに移動させて、猫の位置と空間とをディバイダーで仕切り、猫のいない側の底を新聞で敷きます。この時点で、食べ物と水も入れることができます。水が簡単にこぼれないように、浅めのお皿を使いましょう。猫にエサを与え、1日2回、新聞を(猫の糞尿を集積するので)新しいものと取りかえましょう。

このようにして何日も猫を捕獲器に入れておいたままにするのは残酷なことだと考える人も、時々います。実際のところ、捕獲された状態の野良猫は、大きく開け放った空間よりも、狭くて暗い空間の方がより安全に感じ、好みます。もし猫を大きなケージに入れれば、隅にしゃがみこんでじっとしているでしょう。通常、捕獲器の中でも、野良猫はけっこうくつろいでいます。定期的に掃除さえしていれば、捕獲期間中も猫はじゅうぶん大丈夫です。

エサと水は手術の前の晩に捕獲器から取り去り、猫の胃の中を空腹にしておかないといけません。そうしておかないと、猫が手術中に嘔吐して窒息してしまう危険性があるからです。

ステップ8: 返還後のモニタリング(監視)

手術後、合併症などの手術後の問題が見られないようであれば、48時間後に、猫たちを捕獲した場所に放してあげてください。野良猫はとてつもない縄張り意識が強いので、別の場所に移住させるのは、新しい場所に慣れるまでに3週間ものあいだ監禁状態にしておく必要がある難しい過程です。もし彼らを見つけた場所に戻してあげなければ、猫はすぐに行方不明になってしまうでしょう。

ひとまず猫の避妊・去勢手術を済ませて返還したところで、まだTNRの過程は終了しません。大変な仕事のほとんどは終わりましたが、長期に渡るモニタリング(監視)は極めて重要です。徐々に猫の数を減

らしていくTNRの効力にとって一番の脅威となるのが、人間が相変わらず飼い猫を放棄し続けているため、捨てられた猫がコロニーを見つけて入ってくる現実です。コロニーの新入り猫たちをモニターしていないと、遅かれ早かれ、捨てられた猫たちのペアがまた新たに繁殖のサイクルを始めます。このような事態を防ぐために、新入りたちはすぐに捕獲して避妊・去勢手術を済ませ、可能であれば里子に出し、そうでなければコロニーに戻します。もし猫が捕獲を巧みに避けて、仔猫を産んでしまった場合には、人間に慣らすことができる理想的な生後6～7週間目に保護することが必要です。

また、時間と共に状況は変化するため、継続したモニタリングは大切です。続けて居合わせることによって、地域社会で何か問題が起こったときに、住民たちが世話人に報告できるようになります。新しい住人には教育する必要があるかもしれませんが、以前の住人や所有者が気にならなかったことについても何か不平を持っているかもしれません。時折、避妊・去勢手術の済んだ猫がとてもフレンドリーになることがあります——安全に外においたままにするには人懐こすぎるくらいに。そのため、捕獲と避妊・去勢手術がTNR過程の最も大変な部分ではあっても、それはほんの始まりであって、終わりではないのです。面倒を見るということは現在進行形で継続していく責任であり、それが野良猫コロニーの長期的な成功と健康の鍵を握っているのです。

地域全体のTNR計画

地域コミュニティのひとつひとつに、TNR計画を形成するにあたって配慮すべき独自の資源と状況があることでしょう。TNRは地域全体の規模で実践するともっと効果を増します。そうすることで、まだ避妊・去勢をしていない猫が既に管理されているコロニーに渡ってくる例が減少し、地域の保健所と動物管理局にとって総合的に及ぼす影響と費用の削減は大きいものになります。以下に紹介するのは、地域全体として計画に取り組む際に必要となるいくつかの基本的な要素で、地域によって手段に違いがあるにせよ、成功に導くTNR計画を確立するために役立ってくれるものです。

- 1. 業者機関との連携** この媒体は民営でも行政機関でもいいのですが、合法的な趣旨に基づいて、地方自治体の権限によって認可されている必要があります。その目的には、TNR計画の指導、世話人たちと他の機関の仲介、そして担当地域の野良猫コロニーの特定があります。時に、既存の動物福祉団体との合体から組織を創設、あるいは、現在あるシェルターや団体の支部組織として創設することが、最良のアプローチになります。
- 2. 無料の避妊・去勢手術** 避妊・去勢手術や耳先カットやワクチン代が無料に近づけば近づくほどTNR計画はもっと効果的になります。いくら低料金であっても、猫の数が多ければ、世話人にとっては、大きな費用の負担となります。世話人たちは、本来ならば基本的に社会事業である野良猫の数を管理するという仕事を、個人的な時間と労力をかなり費やして行っているのです。そのような彼らに自腹まで切らせることはないのです。
- 3. 捕獲器バンク** 多くの捕獲を促進するために、これは特に重要なことです。通常、政府機関でないと大量の捕獲器を備えて貸し出しの連携をするだけの金銭的余裕がありません。捕獲器を借りる人には、料金ではなく、払い戻し可能な一時保証金を請求すべきです。ケージとしても使用できる、36インチ(91.4cm)の両端扉つきの捕獲器を使います。猫が捕獲器の中に閉じ込められているあいだも安全な清掃と給餌ができるよう、トラップ・ディバイダー(仕切り)も貸し出すようにします。
- 4. 場所の確保** 地域社会の性質によって、保留場所の確保は容易にも困難にもなるでしょう。人々がほとんどアパートやマンション暮らしの密集した都会では、猫15匹を5日間保留しておく場所を見つけるのは難しいのに対し、郊外では人々はガレージや地下室を持っています。ボランティアが給餌と清掃の作業をして、避妊・去勢手術が行われる同じ施設内で野良猫を保留できる場所が提供できれば理想的

です。もしその選択余地がなければ、世話人の責任で保留場所の確保と維持をするのが一番でしょう。これは、万が一、地方自治体が猫の世話が元で起こり得る危害のリスクに責任を負いたくない場合に、責任を期すためにもベストでしょう。

5. **里親探しと一時預かりボランティアのネットワーク** 世話人たちや野良猫活動家たちは、仔猫や捨てられた飼い猫に飼い主を見つけるためのネットワークの支えがあると、もっと自由に活動することができます。そうすることで、里親を探しながら家に猫が増えていくこともなく、捕獲と避妊・去勢手術のためにもっと多くの時間を費やせます。
6. **コロニー登録システム** 統計学的な目的上、手術・ワクチン済みのコロニーは、野良猫の数の増加および減少の追跡と、万が一コロニーの猫が保健所に届けられた場合には世話人に連絡ができるように備えて、記録しておくべきです。収集する情報として、世話人の連絡先、コロニーの場所、そして各猫の描写と経歴(毛の色、年齢、いつどこで手術とワクチンをしたか、耳先カットをしてあるか、そして、あてはまる場合は、マイクロチップ番号)があります。耳先カットまたは他の方法で印をしてある野良猫が保健所に引き渡された時に備えて、世話人に通知できるまで待機する時間や、必要に応じて不動産所有者との仲介役を立てる手続といった準備を完全に整えておくことです。
7. **条例または世話人としての契約書** 助成金、獣医による診察、そしてTNRコロニーの支持を受ける交換条件として、世話人には、猫に避妊・去勢手術とワクチンを受けさせ、定期的な給餌とシェルターを提供し、現場を清潔に保ち、登録情報を更新し、仔猫の保護をするといった一定の必要条件を満たしてもらうよう、法的な基盤を規定しておくといいいでしょう。
8. **教育プログラム** TNRの基本事項と野良猫の世話について世話人たちをトレーニングする定期的なワークショップの開催は、TNR計画のスムーズで広範囲な実践に役立ちます。
9. **エサの無料配布** 世話人の協力の動機付けに、キャットフードの無料配布くらい役立つものはないでしょう。その上、特に固定収入の中から多くの猫たちにエサを与えることは大きな金銭的負担になりかねません。
10. **地方自治援助の公示** 特に過去に例(たいていが“捕獲・殺処分”である場合が多い)がある場合には、信頼と協力を得るために公示は重要です。

このマニュアルは、2003年度「Asia for Animals」会議のための資料として、ニューヨーク市のネイバーフッド・キャッツによって作成されました。Webサイト: www.neighborhoodcats.org

野良猫に関する情報の補足資料:

『Community Approaches to Feral Cats: Problems, Alternatives & Recommendations』ハンドブック (Margaret R. Slater執筆、HSUS発行)の無料ダウンロード先: <http://www.hsus.org/ace/14631>

『ANIMAL PEOPLE』オンライン新聞: www.ANIMALPEOPLENEWS.org